OLIVE 香川大学学術情報リポジトリ

第一章　少子高齢社会における家族・近隣関係の変容構造

時岡　晴美

第一節　家族と近隣の人間環境からみたエイジング

現代における少子高齢化の進展は、家族の生活実態に多大な影響を及ぼしている。厚生労働省の二〇〇七年調査によると（「二〇〇七年国民生活基礎調査」厚生労働省、二〇〇八年）、平均世帯人員数は過去最低の二・六三人となり家族の小規模化が一層進んだことが明らかとなった。祖父母・父母・子どもといった三世代からなる世帯は四〇四万世帯で八・四％となり、一九八六年の調査開始時一五・三％から急減して過去最低となった。一方、六十五歳以上の「高齢者世帯」は九〇〇万世帯と前年より五四万世帯増え一八・八％を占めるに至っている。このような家族構成の変化は、家族構成や家族関係、それを取りまく地域や近隣の人間環境にも変容をもたらしていると考えられる。

生活者にとって家族とは、人生の過程でありライフスタイルであり、家族形態は個人が選択するものという側面があるため、近年の家族にみられる変化の全てが社会変容に起因するものではないが、家族人数の減少による家族の小規模化や、高齢者のみの世帯が増加を続けていることな

OLIVE 香川大学学術情報リポジトリ

どは、まさに少子高齢化が如実に現われた結果であるといえよう。家族はファミリーライフサイクルの進展に伴って変化するものであるから、個人の選択の如何に関わらず、家族形態や家族関係も変化していく。いわば家族にとってのエイジングである。個人にそれぞれ発達段階があるように、家族にも家族の発達段階があり、各ライフステージではそれぞれに特徴的な家族形態や家族関係が現れることになる。

筆者らはかつて中国・四国地域において実施した中高年女性の実態調査において[1]、中高年女性の社会的ネットワークは家族ネットワークが中心であり、それに加えて、外的で緊急度の高い依存内容の場合に近隣関係リンケージが活性化されることを明らかにしている。個人と家族のエイジングとともに、家族形態や家族関係にはどのような変化がみられ、家族に対する期待はどう変化するのだろうか。また、近隣関係や地域とのつながりにはどのような変化がみられるのか。本章では、家族と近隣の人間環境という側面から家族のエイジングについて考察する。

1)長石啓子・時岡晴美他、「中国・四国地域の社会的ネットワークの現状と課題　第四報―家族状況・居住状況が社会的ネットワークへ及ぼす影響―」日本家政学会誌、第四八巻、第九号、一九九七、七六三～七七三頁。

OLIVE 香川大学学術情報リポジトリ

第二節　家族の生活とその将来像―三木町における住民意識調査から―

（一）調査の概要

「地域社会におけるエイジング総合研究」プロジェクトの「家族・地域・教育領域」では、三木町及び香川県と連携して、地域住民の生活実態からみた家族とコミュニティに着目して共同研究を行った。三木町に在住する高齢者とその家族の生活実態や生活意識についてアンケート調査を実施し、コミュニティのあり方について生活と教育の視点から明らかにし、今後の高齢社会における地域づくりや新たな住民組織のあり方について検討した。本稿では、筆者が担当した「家族の生活とその将来像」を中心に述べる。

調査は、香川県三木町に在住する満二十歳以上の男女一千人を対象とした。住民基本台

表１－１　対象者の性別

性　別	人（%）
男　性	148　(39.1)
女　性	227　(59.9)
無回答	4　(1.0)
計	379　(100.0)

表１－２　対象者の年齢

年　齢	人（%）
20 ～ 29 歳	25 (6.6)
30 ～ 39 歳	37 (9.8)
40 ～ 49 歳	56 (14.8)
50 ～ 59 歳	90 (23.7)
60 ～ 69 歳	67 (17.7)
70 ～ 79 歳	64 (16.9)
80 ～ 89 歳	29 (7.7)
90 歳 以 上	9 (2.4)
無　回　答	2 (0.5)
計	379 (100.0)

表１－３　対象者の居住歴

居住歴	人（%）
自分の代から	187 (49.4)
親の代から	47 (12.4)
祖父母の代から	41 (10.8)
先祖代々	94 (24.8)
無回答	10 (2.6)
計	379 (100.0)

表１－４　対象者の家族構成

家族構成		人（%）
核家族	本人と配偶者	81 (21.4)
	親との二世代	55 (14.5)
	子との二世代	121 (31.9)
拡大家族（三世代以上）		83 (21.9)
単独世帯		18 (4.7)
その他		9 (2.4)
無回答		12 (3.2)
計		379 (100.0)

OLIVE 香川大学学術情報リポジトリ

帳による無作為抽出を行い、二〇〇五年九月に郵送法にて実施した。有効回答は三七九票（三七・九％）、回答者の属性は表1―1～1―3に示すとおりで、調査項目は、家族関係や生活の満足度、近所や地域との交流について、将来の生活に望むことなどである。

（二）家族の日常生活と、家族への期待

現在の世帯構成は核家族が七割近くを占め、特に二世代世帯が多い（表1―4）。家族との食事頻度が「ほぼ毎日一緒」六九・四％、「週に一～二回一緒」一一・三％と全体に高く、家族のコミュニケーションの機会はかなり確保されているとみられる。家族関係の満足度では（図1―1）、全体の八割以上が満足しており、若年層と高齢層で比較的満足度が高くなっている。

「家族の生活に役立っていると感じること」の設問では（図1―2）、「家事の担い手」「家計を支える」「家族の相談相手」をほぼ半数の人が挙げている。手段的役割は比較的実感しやすいこともあろうが、生活共同体としての家族の機能が充分に発揮されているとみることができる。

「困ったときの相談相手」として家族を挙げた人は（図1―3）、「配偶者」が五〇・七％と圧倒的多数を占める。その他の家族員では「娘」「息子」「兄弟姉妹」が挙げられるもののいずれも一割に満たない。世帯構成とのクロス集計結果からは、本人だけの単独世帯は子どもや友人に、配偶者のみの核家族は配偶者に、二世代・三世代同居の場合には配偶者・子ども・友人の順で、いずれも家族に相談する割合が圧倒的に高い。年齢別にみると、中年層では「配偶者」、高齢層で

OLIVE 香川大学学術情報リポジトリ

は「息子」や「娘」の他に「近所の人」が挙げられる。すなわち、定位家族にいるうちは友人など個人的関係の繋がりが中心であるが、自身の創設家族を持ってからは配偶者になり、高齢期になるにしたがって子どもを頼りにするようになることがわかる。高齢者の場合、身近な存在として「近所の人」との関係がかなり重要視されているといえる。

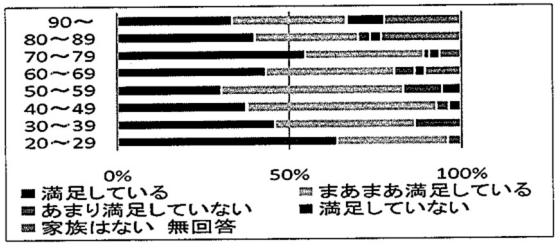

図１－１　年齢別にみた家族関係の満足度

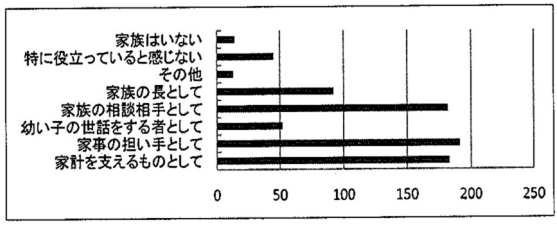

図1－2　家族の中で役立っていると感じること（複数回答）

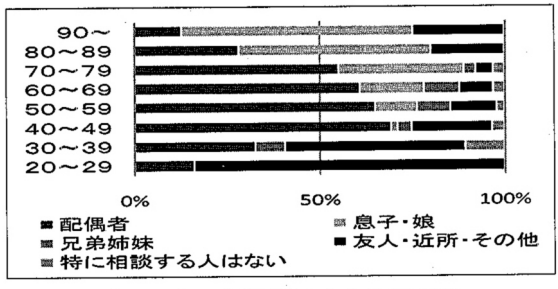

図１－３　年齢別にみた相談相手

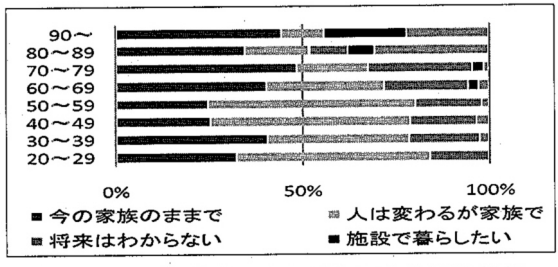

図１－４　年齢別にみた将来の家族形態希望

OLIVE 香川大学学術情報リポジトリ

表1－5　介護が必要になった場合の希望

自身が介護を必要になったとき 人（%）	希望する内容	家族が介護を必要になったとき 人（%）
22（5.8）	家族だけで面倒を見る	14（3.7）
146（38.5）	家族が中心となり不足分は介護サービスなど	221（58.3）
58（15.3）	在宅介護サービスを中心にする	44（11.6）
86（22.7）	施設へ入所	43（11.3）
5（1.3）	その他	3（0.8）
38（10.0）	わからない	23（6.1）
24（6.3）	無回答	31（8.2）
379（100.0）	計	379（100.0）

「自身に介護が必要になった場合にどうして欲しいか」との問いでは（表1―5）、「家族が中心となって足りない部分は在宅介護を利用」がもっとも多く、「家族だけで面倒を見てほしい」と合わせて全体の半数近くが家族の力を期待していることがわかる。一方、「家族に介護が必要になった場合にどうしたいか」との問いでは、「家族が中心、足りない部分は在宅介護を利用」がもっとも多く、「家族だけで面倒を見たい」と合わせて六割以上が家族による介護を考えている。これらから、夫婦を中核としつつ家族関係への期待は大きいとみることができよう。

（三）家族の将来像と、今後の課題

「将来（一〇年後）どのような家族で暮らしたいと思うか」の設問では（図1―4）、「ずっと今の家族で暮らしたい」「顔ぶれが替わるだろうが家族で暮らしたい」と合計七割以上の人が家族で暮らしたいと答えている。前述のように、全体的には生活共同体としての家族の機能が充分に発揮されているとみられるため、近い将来に家族が急激に変化する事態は想定しがたい。個々

OLIVE 香川大学学術情報リポジトリ

の家族の状況に応じて受動的に単独世帯になるケースは発現するかもしれないが、今後の生活者への支援体制としては「家族」を念頭においたシステムを検討すべきであると考えられる。年齢別では若年層の方が家族で暮らすことを希望しており、高齢層では「施設で暮らしたい」が増加する傾向にある。介護の設問でも触れたように、自身の介護で家族に負担をかけたくないという思いの現れとみることができよう。

最後に、自由記述欄で「あなたの一〇年後の生活はどうあってほしいか」を尋ねたところ、何らかの記述のあるものが七割近くを占め、特に「自分と家族について」の記述が全体の二割にみられた。これまで述べてきた「家族」に対する思いや期待の大きさをうかがわせるものである。

以上のように、現在は、家族のコミュニケーションの機会はかなり確保されており、家族関係の満足度が高く、生活共同体としての家族の機能が充分に発揮されていることが伺える。将来も多くの人が家族で生活することを望んでおり、夫婦家族を中核としながら、家族関係への期待は大きいといえる。さらに、高齢者では、困ったときに頼れる身近な存在として「近所の人」もかなり重要視されている。冒頭で紹介した中国・四国地域における中高年女性の実態からも同様の指摘があることや、高齢者に女性が多いことを考慮すれば、今後の検討課題として、高齢者が緊急時に依存できる近隣関係の繋がりを活用し支援するシステムを構築する必要があるといえる。

OLIVE 香川大学学術情報リポジトリ

第三節　エイジングと、家族・近隣関係の再構築
―三世代で暮らす高齢者の訪問面接調査から―

（一）調査の概要

少子高齢地域において、ライフサイクルに沿って健康的な生活を維持する要因について検討するため、ケース研究として訪問面接によるヒアリング調査を実施した。三木町の中でも特に少子高齢化が進んでいる地域として二地区を選定し、当該地区に十年以上居住している三世代以上の家族として協力の得られた五世帯を調査対象とした。二〇〇五年二月中旬～三月上旬にかけて筆者が対象世帯を訪問し、対象者の希望により、高齢者のみ、二あるいは三世代の家族が揃って、それぞれ二～三時間ヒアリングを行った。調査項目は、現在の家族について（家族構成、家族関係、健康状態、経済状況）、日常生活について（生活時間、食事の状況、趣味、近隣関係、地域社会とのつながり）、高齢者のライフヒストリーなどである。

いずれのケースからも、高齢者が力強く前向きに生活する姿が読み取れた。ライフステージの進展に伴う生活変容への対応、少子高齢化によって変容する地域への対峙、現在の家族関係のありようなどについては、それぞれ個別の特徴が顕著に現われていた。本稿では、紙面の制約上、特に家族や近隣環境との関わりの観点から特筆すべき事例としてAさん（七十四歳、女性）について紹介する。

OLIVE 香川大学学術情報リポジトリ

（二）ライフヒストリーにみる家族とのかかわり

Aさんの定位家族は、近隣N町で農業を営んでいた。実母は厳しかったが、実父はウサギの肉や川魚をよく食べさせたり、祭の時にも小遣いをくれたりで、甘やかして育ててくれた。結婚後も地区の祭の時には里帰りし時折は実家に一泊するなど、つながりを持ち続けている。

十八歳の時、徒歩三十分ぐらいの距離にあった農家の三代目Aさんと結婚し、以来、現住宅に居住している。夫は五人きょうだいの長男だったため、同居している幼い弟や妹の世話をずっと夫とともに担ってきたという。夫は山仕事、畑仕事に従事し、肉牛を飼育していたため収入に困ることはなかった。炭焼きもしていて重労働だったが、夫と炭焼き小屋に泊まり込んでの作業は、夫婦だけで過ごせる貴重な時間で楽しみだったという。夫は十年前に他界した。

子どもは長女、長男、次女の三人で、長女と次女は他出し、現在は長男家族と同居している。長男は建設関係で自宅近辺に作業場を持ち、若い人も雇用しており、畑仕事も継承している。長男の妻は隣接地域の出身でとても優しく、長男夫婦の仲が良いので「嫁には恵まれたと思う」という。常勤の看護師をしているため、夜勤の時にはAさんが孫の世話をしてきた。孫は高校生と中学生の男子二人である。二男とは特に仲が良く、最近まで一緒に入浴していたほどである。

OLIVE 香川大学学術情報リポジトリ

（三）現在の生活と家族・近隣関係

現在は野菜のハウス栽培や、炭焼きなどをしている。昨年までは炊事もしていたが、最近はほとんど長男の妻が用意するので、炊飯だけはと担当している。中年期から心肥大で服薬しており現在も週一回通院しているが、日常生活に支障はなく元気に過ごしている。毎朝五時には起床し、夜九時半頃には就寝する。五人家族が揃って夕食を食べ、終われば早々に自室に入ることにしている。長男にはかなり気を使っており「若い人と長く一緒にいると煙たがられる」と配慮していて、他出した長女が姑と同居の経験から何かと忠告してくれるので従っているという。しかし、萎縮して窮屈な生活を強いられているわけではなく、家族が揃って過ごす朝夕の時間は楽しく充実しており、孫の成長とともに変化していく祖母・孫関係も幸福なことと受け止めている。

近隣関係では、法事の招待や旅行のおみやげ配りなど、従来はかなり活発で親密であったが、近年は一人暮らしの女性が増えたため、負担になるつきあいは止めることに決まったとのことである。しかし、近隣関係が消失したのではない。当該地区は、幹線道路から山あいに少し奥まった地理的特徴のため、ふだん通行人は見かけず人の出入りが少なく、また、ほとんどの若年・中年層が高松市や近隣地域に通勤通学しているため、日中ほぼ高齢者だけになる。そこで、高齢者だけで特有の交流が展開されることとなった。若い世代には歓迎されないような手作りのこんにゃくや昔ながらの総菜を交換したり、手芸や家事技術の学習会を催したり、気兼ねのない井戸

OLIVE 香川大学学術情報リポジトリ

端会議など、従来の村落的な交流が展開されている。しかも、かつては夫や姑を気に掛けながらのつきあいであったが、現在は、限定された時間であるとはいえ、すべてのしがらみから解放されて自由で独創的な発想の活動がのびのびと展開されており、これまでにない楽しい幸福な生活であるという。笑顔で語るAさんには、生き生きとした活力が満ちあふれて感じられた。

この事例からは、エイジングと家族・近隣関係の変化が明確に読み取れる。Aさん自身の発達過程、家族の発達過程と、それに伴って変化していく家族形態や家族関係、近隣とのつながり。それらは、発達段階それぞれにおいて家族・近隣関係を再構築されたことがわかる。充実した高齢期のために、この点が特に必要であることも推測できよう。

第四節　今後の課題—むすびにかえて—

事例調査対象者の現在の生活についてそれぞれの特徴を整理すると、共通点を見出すことができた。すなわち、

・高齢者は、家族内での自分の役割を果たしており、家族が協力して生活することに生きがいを見出している

・家族との関わり方や協力の仕方に各自の工夫がみられ、若年世代のライフスタイルを尊重しながら、自分らしい生活の方法を構築している

OLIVE 香川大学学術情報リポジトリ

・管理中の疾病を持つケースもあるが、それぞれの日課や仕事を持っている
・近隣に親類や仕事を通じての仲間があり、その関わり方にはライフステージの進展に伴う変化がみられ、それぞれ固有のスタイルを確立している
・少子高齢化が進み、交通なども不便な山里に居住しているが、地域の生活や伝統に愛着と誇りを持っている

などである。いずれも家族を中心に据えながら、それぞれの家族・近隣関係を築いており、しかも若い頃とは異なる関わり方を構築している。エイジングに伴って再構築してきたとみることができる。

第二節で述べた意識調査結果からも、家族が重要視されていること、ほとんどが将来的に家族で生活したいと望んでいることを指摘した。理想的な形を挙げるとすれば、夫婦中心の生活でありつつも家族に大きな期待を寄せながら、また高齢になるにつれて近隣関係を重視しながら、エイジングに伴って家族や近隣といった人間環境を再構築していく、というところになろうか。

人間の集団である「家族」は、家族自体のエイジングに伴ってその関係が変化していくものである。個人の思いとはうらはらに、個人のエイジングに伴って家族規模が縮小していき、やがて一人になることもありうる。ライフステージの進展とともに、生活者自身が満足できる「家族」の姿をいかに構築できるのか、社会がそれをいかに支援できるのか、また、思いがけず高齢単独世帯となった場合、家族に替わるものとして何を準備できるのか、エイジズムとセクシズムの観

OLIVE 香川大学学術情報リポジトリ

点からも早急に検討すべき課題は多い。

〔参考文献〕

NHK放送文化研究所『現代社会とメディア・家族・世代』新曜社、二〇〇八年
安川悦子・竹島伸生編『「高齢者神話」の打破―現代エイジング研究の射程』御茶の水書房、二〇〇二年
金子勇編著『高齢化と少子社会』ミネルヴァ書房、二〇〇二年
横田明子・時岡晴美編『生活シミュラークルへの展開―現代の生活経済学総論』同文書院、一九九五年
日本家政学会家政学原論・家庭経営学部会中国・四国地区研究会高齢者問題研究グループ『中国・四国地域における高齢者の生活実態調査報告書』、一九八八年